

この度は、栄誉ある早稲田大学芸術功労者としての賞をいただくことになり、光栄に存じます。ありがたく、かつ感謝の気持ちでお受けいたしたく存じます。

卒業生諸君、ご卒業おめでとうございます。早稲田大学を卒業されて、それぞれの明日に向かって希望と期待で胸をふくらませておられることと思います。

もう半世紀以上むかしになりますが、私の早稲田大学の学生時代のことを思い出しています。男子学生の半分ほどが、制服、制帽で大学に通っている、そんな時代でした。

ちょうど60年安保闘争のさなかで、日本の未来が問われ、大学という組織そのものが問われている、そんな時代でした。

伝説の早慶6連戦がありました。文京区にあったわが家に、10人ほどが1週間も泊まりこみ、連日、神宮外苑に通ったものでした。

人類初の宇宙飛行士・ロシア空軍のガガーリン大佐が早稲田にやって来ました。記念会堂に見に行ったのを思い出します。青い軍服姿のかっこういい、小柄ながら姿勢のいい青年でした。

暗殺されたアメリカ大統領ジョン・ケネディの弟・若い司法長官ロバート・ケネディーも早稲田にやってきました。この大隈大講堂で、昂奮した学生たちと世界平和について大激論をかわしたのをおぼえています。

そうしたにぎやかな時代の早稲田の学生だったことで、私の人生の大枠が決まったような気がいたします。

私は「短歌」という文字通り短い日本の詩にかかわりつつ長い年月を過ごしてきました。「短歌」という詩は、地味ではありますが、長い時代にわたって、日本語の大切な部分をになってきました。

有名な話ですが、秋の虫の音を美しいと感じる日本人の心のメカニズムは、短歌をはじめとする日本古典の詩の力によっていると言われています。日本人の感性の、大きな部分を、短歌が形成してきたのです。

私自身も、微力ながら、日本語を、つまり日本人の心を、より豊かにするために、何ほどかの仕事ができればと考えて、短歌にかかわってきました。

早稲田大学には、先輩にすぐれた歌人が多くおられます。窪田空穂、若山牧水、北原白秋、土岐善麿といった方々です。

また、私は、短歌の縁で、同時代のすぐれた才能に出会うことができました。

早稲田短歌会の2年ほど先輩に寺山修司さんがおられ、学生時代から47歳で他界されるまでつきあってもらいました。

日本文学特論という授業で、学生だった俵万智とであい、今日まで同じ短歌雑誌「心の花」の仲間として短歌に関わり合ってきました。

早稲田大学から、このように多くの歌人たちが出たことは偶然ではありません。大隈老侯以来、早稲田大学は、言葉、なかんずく日本語を大切にする校風があります。そうした大学の風土が、早稲田文学を生み、早稲田に多くの歌人を排出したのだと思われまます。

卒業生諸君、言葉を大切に考える早稲田の伝統を自覚しつつ、それぞれ、ご自身の未来を築いて行かれんことを願っています。

卒業生諸君のご幸運を願い、早稲田大学のいっそうの発展を祈念して、ご挨拶の言葉を終えたいと思います。

2017年3月24日

佐佐木幸綱